しろね図書館だより

発行 新潟市立白根図書館
No. 69　平成18年2月1日

一個の人間

自分は一個の人間でありたい。
誰にも利用されないでありたい。
誰にもの人間でありたい。
一個の人間を利用したりしない
他人をいびつにしたりしない
その人もいびつにされない
一個の人間でありたい。

自分の最も深い泉から
最も新鮮な
生命の泉をくみとる
一個の人間でありたい。

誰もがこそ人間だと思う
一個の人間でありたい。
一個の人間は
一個の人間でいいのではないか
一個の人間

独立人同志が
愛しあい、尊敬しあい、力をあわせる。
それは実に美しいことだ。
だが他人を利用して得をしようとするものは、
その醜さを本当に知るものが一個の人間。
いかに醜いか。

武者小路実篤

▶蔵書点検による休館のお知らせ◀

2月13日(月)～2月28日(火)

上記の期間、蔵書点検の為、しろね図書館は休館します。みなさんには大変ご迷惑をおかけしますがよろしくお願いします。

＊2月12日(日)まで16冊まで4週間貸出をしています。

蔵書点検って何？

現在、しろね図書館には12万冊以上もの資料があり、そのすべてを点検、修理します。なくなっている資料がないか、住所の違う資料がないか等、一つ一つ調査します。

1月の

来館者 …… 13,621人
貸出冊数 …… 12,216冊
予約件数 …… 200件

ブックバス利用者 …… 降雪期は
ブックバス貸出冊数 …… 安全の為、運休

リクエスト情報（しばらくお待ち下さい）

1位　東京タワー　（12名）
2位　生協の白石さん　（5名）
3位　容疑者Xの献身　（4名）
4位　告白
　　電車男
　　人はなぜ生まれ　いかに生きるか
　　マオ　（3名）　他

子どもたちといっしょに

「木いちごつみ」

きしだ えりこ 詩
やまわき ゆりこ 絵
（福音館書店）

日常の生活の中で、詩にめぐり合うということはすごく稀なのかもしれません。

でも、詩はとても身近で、私たちの目の前にある気持ちや物を表わしているから、とても単純で、すぐに心の中に入ってきます。

例えば、この絵本の中にある「むしばとケーキ」なんか、子どもの頃にみんなが体験しそうな情景です。どんな詩なのかは本を開いて読んでみてください。なんとなく、タイトルから内容がわかりそうですけど。

詩に触れなくても生きていくことに困りはしませんが、しかし、心の中にはどこかで聞いた詩が残っているはず。たくさんの詩と出会うことができれば、物語を読むのと同じように、私たちの心を豊かにしてくれるはずです。

第64回読書会

（しろね図書館友の会
しろね図書館 共催）

「野に出た小人たち」

メアリー・ノートン 作
林 容吉 訳
（岩波書店）

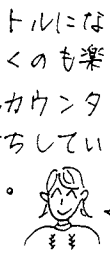
「床下の小人たち」の続編です。

前回、借り暮らしの小人ポッド、ホミリー、アリエッティは人間に見つかってしまい、ついに借り暮らしをやめ、野原へと脱出します。そこからが今回の物語。

野原での生活はとても大変。なにせ今までは、人間のものを借りてきさえすれば生活できていたのですから。食料も住む家も、これからは自分たちでなんとかしなければなりません。その上、野原には、ヘびやが、フクロウまでいるし、雨は降るわ、風は吹くわで危険がいっぱい。

各章のタイトルになっているアリエッティの日記格言集を読んでいくのも楽しいです。

本は図書館カウンターに用意してあります。みなさんの参加をお待ちしています。一緒に楽しいひとときを過ごしましょう。



2月の行事

1（水）	絵本のじかん 3:00～
4（土）	おはなし会 3:00～
8（水）	第34回あかちゃんがはじめてであうほん 絵本のじかん 3:00～
11（土）	おはなしかご例会 10:00～ おはなし会 3:00～
12（日）	第64回読書会 1:30～
13（月）	蔵書点検（休館） 2月13日～2月28日
3月1日（水）	A.M 10:00～ 開館

＊降雪期、安全の為ブックバスは運休します。

第63回 読書会

平成18年1月15日（日）
午後1時半～3時半　参加者9名

イソップ株式会社

（中央公論新社）

井上　ひさし　著

夏休みを、田舎のおばあさんのところで過ごしているさゆりと洋介の姉弟。

二人の父は、小さな出版社「イソップ株式会社」社長にして、売れない童話作家でもある。

彼には、亡き妻との約束があった。それは、「毎日一つずつお話を作って、子どもたちに話す」ということ。

約束は子どもたちが田舎で過ごすときも例外ではなく、姉弟のもとには、毎日父が作ったお話が入った手紙が届けられる。その手紙を送ってくれるのは、両親の信頼も厚かった編集者の弘子さんだ。

夏休みをすごす姉弟の日々に、37本の父のお話をちりばめた、新しい家族の絆の誕生を描く物語。

★★　参加者の感想から　★★

◆イソップ株式会社ってなんだろう？　と気にしつつ読んだ。1話ごとに教訓があり、だからイソップ～なのか、と納得。だが、小話の最後に教訓をはっきり書いておかないほうが、子どもが自分で考えるよい機会になるのに残念。

◆後に引くことはないけれど、さっと読める読了感。大きなストーリーの起伏があるわけではないが、それでも物語は少しずつ、着実に変化していく。

◆父の子どもへの愛情がよくわかる。毎日心のこもったお話を考えてプレゼントすることは、純粋にすごいことなのだと感じた。

◆林間学校の生活を通して自然とふれあい、ひとまわり成長していく子どもたちの姿がすがすがしい。

◆姉は何かにつけてものの数を数える癖の持ち主だったが、自分も小さいころは似たような癖があったので妙に共感する部分があった。

◆いたずら好きで知的好奇心にあふれる弟は、「サザエさん」のカツオをほうふつとさせる。自由研究など次々に発想がわいてくるのがすごい。いまときこういう子は珍しい。きっと大人になっても上手に世渡りしていくことだろう。

◆地球温暖化をはじめとする環境問題について考えさせられる内容だった。一人ひとりは60億分の1でも、6人集まれば10億分の1。小さな積み重ねが大切だと思った。

◆いくら懐いているといっても、やっぱり子どもというものは新しいお母さんを受け入れるのには抵抗があるもの。新しい家族を作っていくうえで、どうやったら抵抗なく受け入れてもらえるのか、ということに心を砕いているのがよくわかる。

◆「人間のしでかしたことは、人間自身の手で決着をつけるしかない」というのが、魔女のくれた本当の教訓であったように思う。

◆ろうそくに火を灯してお話を読む場面があって、ちょっとニヤリとさせられた。子どもは必ずしも積極的にお話を聞いてくれるとは限らないが、親が作ってくれた物語なら楽しく聞いてくれるんじゃないだろうか。

★　★　★　★　★

さて、次回の読書会は、
メアリー・ノートン　作

「川をくだる小人たち」

2月12日（日）　午後1時半～3時半

本は、図書館カウンターで貸し出ししています。どなたでも気軽に参加できますので、どうぞおいでください。お待ちしております。

（清水　隆）

～図書館員がおすすめするこの一冊～

『ポリッセーナの冒険』

ビアンカ・ピッツォルノ作　長野徹訳
クェンティン・ブレイク絵　（徳間書店）

子どものころ、親に怒られ頭にきて「私は、本当はこの家の子じゃないのかもしれない、だから怒るんだ」なんて考えたことはありませんか？

ポリッセーナもよくそんな風に思っていました。怒られて罰を与えられた時は、空想を膨らませて、「自分の本当の親は身分が高くてお金持ちなのだが、わけがあって生き別れになった」とか、「両親は王さまとお妃さまで自分は本当はお姫さまなんだ」などと想像していました。でも次の日になると、そんなことはすぐに忘れてしまうのでした。

ところがある日、いじわるな友達に、自分はもらい子で修道院に捨てられていたと聞かされます。そこでポリッセーナは家を飛び出し、本当の両親を探しに行く旅に出ます。

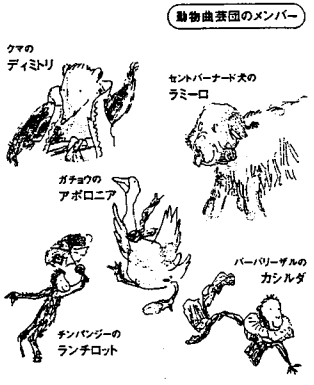
旅は道連れとは昔からよくいいますが、ポリッセーナにも一緒に旅をする仲間ができます。ルクレチア率いる動物曲芸団です。彼らはポリッセーナの親探しをしながら、行く先々で芸をし、旅をすることになりました。

出生の秘密を確かめに、修道院に行ったポリッセーナは、捨てられた時にそばに置いてあった手箱をもらいます。この中の物を手がかりに親探しをするのですが、・・・。

わくわく、はらはら、どきどきの冒険小説です。もう少しで見つかるという時に、また新たな謎が出てきて振り出しに戻ったり・・・。展開も主人公達の行動も目が離せません。彼女達の元気でたくましいことといったら！

作者はイタリアを代表する児童文学家。子どものころから本が大好きで、子どもの放送番組の制作をしながら本を書き始め、その後創作活動に専念したそうです。この物語は、親探しという古典的な物語の枠組みを借りながら、現代の子どもたちが楽しめるお話を作ろうと思い、書いたそうです。子どものことをよく知っている作者だからこそ、ポリッセーナとルクレチアがこんなにも生き生きしていて、読者は冒険を一緒になって楽しめます。

さあ、手に取ってみてください。そしてどんな旅になるのか、それは読んでからのお楽しみ！

（ティーン973ピ）

[司書：中川沙穂里]